

大同、土くれと石炭の街

同室の二人はまだかえってはいない。大同(タートン)午後七時二〇分、六月二〇日(日)。北の街、大同。北京からは北西三八二キロ、内蒙古との境界あたり、北魏の都。そして遼、金代の副都。メインストリートの華やかな繁華の背後に広漠と広がる廃虚の街。土くれの街。暮れかけた土くれの荒野に、土の城壁。廃虚にそびえる鼓楼と夕暮れの赤。侵食する廃虚に侵されながら、ひっそりと土に埋もれる善化寺のたたずまい。

さつき善化寺からの帰り道に買ったトマトを晩飯代わりにむさぼりながら、僕は今ぼんやりとテレビを眺めているところだ。シャワー室が開くにはまだ時間があるので、なんとはななくただ時間をもてあましている。

三人部屋のベッドには、僕ひとり。昼にこのホテルにチェックインしたときには人の気配はまったくなかったのだけれども、今二つのベッドには何かの包みが残されていて、僕が大同の街をひとまわりしている間に二人連れがチェックインしてきたのだということが分かる。ただ気配としてだけ存在する同室者たち。ベッドの上に残されたピニールの包みには「Nagasakia」の印刷。ただ気配としてだけ存在する日本。と、そして日本人。しかしNagasakiaで買い物をする中国人だっていないとも限らないではないか。ぼんやりとした物思いを漂わせながら、僕は煙草をくゆらしている。僕をひとつの座標に確定してくれる、もうひとりの他人が欲しい。それが日本というある種のいとわしさを感じさせる定点であったとしても、そこからの遠さ近さを感じさせてくれる、そのような距離感が欲しい。僕という位置をはっきりと感じさせてくれるある種の遠近法。煙草の煙を吐き出し、ぼんやりとテレビを眺めている僕は、「Nagasakia」の包みが気配として感じさせる人、その存在のことを、我知らず待ち焦がれている。

*

昨夜西安を出発した列車は予定通り午前一〇時五〇分に大同に到着した。西安付近ではすでに刈り取られたあとだった麦は、ここ大同付近ではまだ青く、その穂先をぴんととがらせていた。列車の窓から青い麦畑を眺めながら、僕は北という位置、西安からの距離を感じていた。

大同の駅は決してこじんまりとした田舎の駅ではなく、地方都市の駅であり、駅前にはロータリーもあるのだけれども、駅前の繁華はない。車やバスの通行も少なく、駅特有の雑然とした人の行き来、賑わいもない。というのも大同の駅は城壁に囲われた大同の市街地からはかなり離れた

北方にあるからだろう。西安という大都会からやって来た僕は少しとまどいながら駅前広場に一步を踏み出したのだった。

大同には一泊してすぐに北京へと向かうつもりだったので、とりあえず售票処に足を踏み入れた。ここにも人影は少なく、数人程度の客だけ。北京方面行きの前売り券の窓口で、明日二日、午後一時発の硬座チケット（一九元）を買った。意外に簡単にチケットを手に入れることができたので、心も軽く、大きな荷物を行李寄存処に預け、大同地図を買い、またま停車していた市街地行きのバスに飛び乗った。

一五路のバスは駅前から市街地の方へと新建路と名付けられた大通りを南に下り、西城壁の西側を通っていく。ガイドブックに紹介されているホテルは少なく、その三軒ほどが城壁の南にかたまっていたので、その付近でバスを降りるつもりだった。途中バスはにわかには繁華な場所を通り、百貨大楼やその付近を歩き交う人々の明るい賑わいに心ときめくものを感じただけけれども、それはあとのことにして、そのまま通過。市街地の南はずれ、大同賓館の付近でバスを降りた。

しばらく大通りを歩いて、大同賓館はすぐに見つかったのだけれども、その敷地に足を踏み入れて、僕はがくぜんと立ちつくした。というのも、ホテルの建物には足場が組まれ、また敷地のあちこちには建築資材が置かれていて、一目で改築中だということが分かったからだ。それでもふんざり悪く、改築中でも一部で営業していないかな、と建物のまわりをうろろしたのだけれども、やはり全面改築中で営業しているらしき様子はなかった。がつくりとして建築資材に腰を下ろして、煙草を一服したのだった。初っぱなから肩すかしをくらったので、これは気合を入れなおす儀式。

さて、大同賓館がダメとなると、次はそこからしばらく東へ歩いたところにある雲崗賓館か、その通りをへだてた向かいにある紅旗旅社ということになるのだけれども、雲崗賓館の方はCITSのある大同一のホテルで高そうなので、迷わず紅旗旅社の方に当たってみることにする。ところがガイドブックには泊まれるようなことを書いてあるのだけれども、旅社という名前に一抹の不安を感じつつフロントならぬ帳場に当たってみると、案の定、にべもなく外国人は泊めない、と断られてしまった。

他にはホテルの情報がなかったので、しかたなく雲崗賓館へ行ってみることにした。最近建てられたらしく思われる立派なホテルに足を踏み入れて、フロントで尋ねてみると、予想通りドミトリーはなく、一泊二百元のツインなら空いているという答え。ここのとこ長いあいだ二十元程度のホテルにしか泊まったことはなかったもので、とてつもなく高い値段だと、僕には思われたのだった。さも困ったような様子で、若い服務員

の女性に、大同には他に泊まる場所はないのですか、と尋ねると、彼女はしばらく考えて、秘密を打ち明けるようにもうひとつの宿を紹介してくれた。なんのことはない、同じ敷地内の門を入ったところにあるCITSの建物のことだった。CITSの建物がドミトリーの宿舎として使用されているのだ。そちらの方に行ってみると、三階の三人部屋で一泊二元だった。

ホテルの三人部屋には僕ひとり。しばらくゆつくりとくつろいだあと、昼食と散歩にホテルを出た。

ホテルのある場所は付近に市政府もあるのだけれども、南城壁からかなり南に下ったところにあり、閑散とした印象だった。生活や人の匂いというものが希薄な場所だ。すぐく腹が減っていたし、他には食堂というものがあろうにもなかったのだ。さっきの紅旗旅社の隣にあつたちよつと高級そうな宮廷飯店というレストランで食事をした。ちよつとお昼過ぎという時間帯もあり、また日曜日ということもあつたのかもしれないが、店は満員で、次々と料理が運ばれていく店内を食事客のお喋りの声が飛び交っていた。付近の閑散とした街の様子から考えても、いったいどこからこれだけの客が来たのだろうか、ちよつと不思議な気がするほどの店の賑わいだった。

満腹になって、さっきの一五路のバスを逆方向に乗った。途中に見かけた繁華街のところを歩いてみようかと思つたのだ。

大同の繁華街は大西街と呼ばれる通りで、新建路との交差点のところにある百貨大楼が起点になっていて、そこから東へ、ちよつと城壁の中心部にあたるところまで続いている。百貨大楼から少し東へ入つたところには華嚴寺があり、城壁の中心部には九龍壁、そして南の城壁近くには善化寺がある。

あいかかわらず買物客や憩いの人々で賑わっている百貨大楼前でバスを降りる。政府関係の建物のようにどっしりとした百貨大楼の前階段のあたりには、カラフルなビーチパラソルの下に露店が広げられ、その脇を初夏の涼し気な装いの人々が通り過ぎ、また何をすることもなく立ち止まり、階段に座り込んだりしている。道路の反対側にも露店や屋台。ふと見ると、斜め向かいのビルの屋上には『軍民一家魚水情深』というスローガンを記したカンバンが掲げられていた。その下を自転車に乗つた人々が軽やかに通り過ぎていく。

歩道にひしめくほどに人々で賑わう大西街をしばらく東に歩き、そこから細い路地を入つていったところに、華嚴寺はあつた。上華嚴寺、下華嚴寺という二つの寺から成る華嚴寺は一〇三八年、遼代に建造されたも

のだ。

大西街の賑わいが嘘のような上華厳寺の境内に入っていた。上華厳寺の大雄宝殿は中国最大規模のものだけでも、現在は屋根の部分の修復中で中には入れなかった。数人程度の観光客が大雄宝殿をバックに記念写真を撮ったりしていた。

境内でしばらくゆつくりとしたあと、いったん上華厳寺の境内を出て、下華厳寺へ。下華厳寺には遼代の三一体の仏像が保存されていることで有名だ。薄暗い寺院の内部に足を踏み入れると、正面に三一体の仏像がすらりと闇に立ちつくすように並んでいる。鮮やかな彩色は半ばはげ落ち、その表面は歳月に黒ずんだ感じだけれども仏像はどれも洗練された優美さをたたえていた。その美しさに心をひかれて、絵葉書のセットを買った。

下華厳寺の境内を散歩していると、ふと耳に日本語が飛び込んできた。見ると、大学生くらいの年格好の数人のグループ。久しぶりの日本語にひかれるような、またグループの旅行者が発散する雰囲気がある。変な気分を味わいながら、彼らとすれ違ふ。

華厳寺を出たあと、再び大西街へと戻り、ごったがえすような賑わいの中を東の方へ歩いていった。市場や映画館、食堂、あるいは大小の商店が並び、日曜日ということもあって行き交う人々には休日のレジャーを楽しんでいるという種々の華やかな雰囲気があつて、その中を歩いていくうちに次第に僕の心も浮かれてくるのだった。

大同の城内には東西南北に大きな通りが十字に走り、西の端からその中心までが大西街。そこから少し東に入ったところに九龍壁がある。ところが都会の繁華街という印象の大西街を東にはずれると、街の様相は一変する。見渡すかぎりの廃虚なのだ。おそらく大規模な街の再開発のためなのだろうが、見渡すかぎり土くれだけの荒野と化していた。僕はあせんと立ちつくし、社会主義の開放経済というのはこういう思い切ったことをするのか、と感じていた。ガイドブックにはこのあたりには新興の繁華街に代わって古い街並が続くと記されているのに。(もちろん思い切ったことをするのは資本主義の開発も同じだけれども。)

九龍壁というのは九匹の龍をかたどった壁で、長さ四五・五メートル、高さ八メートル、厚さ二・〇二メートル。青く彩色された背景に金色の龍が浮かぶように彫られている。明代にモンゴルから北京を守るために大同に王府が置かれていた。その王府の照壁だったということだ。

ぼんやりと九匹の龍を眺めていると、ふとまた日本語が耳に飛び込んできた。数人の日本人観光客を相手にして、中国人のガイドが九龍壁の由来を説明しているところだった。聞くともないままに耳を傾けていると、

以前はもう少し東の大東街にあったのを分解してここへ移動させたということだ。城内のかんりの部分を廃虚と化してしまふほどの再開発のため、九龍壁にも移動してもらったということだろうか。

中心十字路まで戻って、露店のオレンジジュースを飲みながら休憩した。大同は曇り空。雨が降り始める気配は感じられないけれども、空気にも湿り気があり、少々蒸し暑い。

中心十字路から南へ行くと、すぐに鼓樓がそびえ、そこから南は城壁までほぼ一面の荒地だ。古い家屋を取り壊した残骸まじりの荒野だ。ずっと南にあまり整備されているような様子のない土手のような城壁が見えた。城壁の手前には、善化寺の寺院らしいいくつかの屋根が荒地のあいだから覗いていた。静かな荒地地の上空を鳥の群れが飛び回っていた。風が吹くと、荒野のどこからともなく土煙が舞い上がって、目も開けてはいられないようなありさまだ。

荒地地の中の一本道を南に下っていくと、次第に善化寺のたたずまいは視界に明らかになってくる。まわりが一面の荒地地だからだろうか。それとも平坦な荒地地に囲われてその全貌が見渡せるからだろうか。僕には繁華街のすぐ近くにある華嚴寺のたたずまいよりもずっと魅力的な寺院だと思われたのだった。

善化寺は唐代にその前身が創建されたということだけれども、遼金時代に整備され、その時代の寺院としては最もその全体が保存されているものだということだ。

境内に入っていくと、前門には仁王像のような巨大な四体の像。境内に観光客の姿はなく、静かだった。その中には遼金代の仏像が安置されているという大雄宝殿は修復中のため中を見ることはできなかったけれども、古い寺院の建物や、境内の静かなたたずまいに、僕は本当に落ち着いて境内を散策し、また休憩したのだった。

南の城壁を越えると、そのまま南に二〇分ほどでホテルに戻ることができる。城壁の南は再開発の対象にはなっていないらしくて、しずかな郊外の街並が続いていた。所々に果物の露店が小さな店を出していた。しばらく歩いていくと、少し広くなった歩道に人ばかり。人々の背後から覗き見ると、京劇の大道芸だった。しばらく見物したあと、ふたたびホテルの方に向かって歩く。途中の露店でトマト六個とビールを買い込んだ。そんなに腹は減っていなかったし食堂を捜して食事するというのもおっくうだったので、トマトを夕食代わりにしようと思ったのだ。

午後八時過ぎ。トマト六個の夕食を終えて、テレビを眺めながら何をするといふこともなくぼんやりとしていると、漠然とした物思いを踏み破

るようにして、同室者が戻ってきた。七〇才くらいの男の二人連れ。ドミトリーを利用するのはある程度若い者という先入観があつた僕は少しとまどつた。おまけに一目見ただけでは日本人か中国人かにわかには判別できない。ぼんやりとした物思いを突然破られたこともあつて、とまどつていると、

「ああ、こんばんは、日本人ですか」

と二人連れの一人が挨拶をした。

「どうも、こんばんは」

と答えながら、二人連れの背後を見ると、同じくらいの年格好の中国人。そして僕と同年くらいの中国人二人。さらには同じく中国人の女性、その子供らしく思われる二人、と続々と部屋に踏み込んできた。

若い中国人は抱えていた大きなスイカとビールをテーブルに置き、軽く僕に挨拶をした。わけが分からないながらも、僕も挨拶を返した。

それからビールが抜かれ、

「マ、マ、一杯」

というわけで、不思議な酒盛りが始まつたのだ。

次から次へとつがれるビール、そして差し出されたスイカを食べながら二人連れの日本人から聞いた話を要約するとこのようになる。

二人連れの日本人はともに七〇才くらい。今回の旅行では、トルファン、ウルムチから敦煌、西安を経て、張家口、大同へと至つたのだと言う。彼らは五〇年前、日本が華北を占領していた時代に、ここ大同で鉄鋼関係の会社に勤めていて、そこでこの中国人の男性と一緒だったそうだ。その会社は中国の会社を接收して日本の会社にしたもので、日本の敗戦後、この中国人は日本企業の協力者ということだ、また内戦期には国民党の側についたために、ひどく苦勞をしたということだ。七年前に二人がそれ以来初めて中国を訪れたとき、当局にこの中国人の消息の尋ねを出したのだがけれども、当時の状況では名乗りをあげることもできず、消息は分からないままで、最近になつてようやく連絡が取れたのだという。五〇年ぶりの再会だということだ。同席しているのは、当の中国人の男性。その子供の男女二人。娘婿とその夫婦の子供二人。どこか近くのレストランで再会を祝したあと、この部屋になだれ込んだというわけだ。

五〇年ぶりの再会ということだ、ちよつと興奮していたのか、二人連れの日本人は言葉をまくし立てながらビールを立てつづけにつぐし、まだ中国人の方も、たまたま同室になつただけなのに同じ日本人だからということだろうか、こちらも、もう一杯、もう一杯、ときかんに杯を勧めるので、たちまちのうちに僕は酔つ払つてしまった。

もうろうとした意識で、やがて部屋を出ていく中国人たちを見送り同室者の日本人に促されてシャワーを浴びたことは覚えているのだけれども、それからどのようにしてベッドにもぐり込んだのかは記憶がない。

微かな物音にふと目覚めると、二人連れは部屋を出ていくところだった。寝ぼけ眼で二人を見送り、まだ朝早かったので、もう一度寝た。

夢とうつつの間をさまよいながら、僕は平田さんと于さんのことを思っていた。平田さんも二人連れと同じ七〇才前後、いやもう少し若かったか。僕の働いている職場の倉庫係として一緒に働き始めたのだ。平田さんは戦時中、憲兵として中国、アジア各地に駐屯していたのだという。新しい職場になれたころ、彼はまだ少女のように見えるひとりの女性を連れてきた。彼女は于さんといって、北京大学を卒業後、日本の大学に留学生としてやって来た。平田さんは北京に駐屯していたときに于さんの家族の世話になり、その恩返しの意味もあつて于さんとその妹（彼女も就学生として日本に来ていた）の世話をしているのだという。于さんは大学が休みのあいだ、アルバイトとして一緒に働くことになった。僕ら三人は平田さんが駐屯していた場所の話や北京の話に花を咲かせた。そしていつか三人で平田さんの思い出の場所や于さんの家に行つてこようという約束をした。平田さんは僕と于さんの間に立つて、仲人のような役をしようとしていたのかもしれない。僕はまんざらでもなく、中国人との国際結婚の意味に思いを至らせることもなく、あいまいに受け流していた。夏の暑い日々だった。ただ立つているだけで、体から汗が流れてくるような暑さ。倉庫の扇風機はただ熱気をかき回すだけで、気休めにもならない。冷蔵物保存の大型冷蔵庫に入つて、于さんと二人、世間話をした。それから夏が終わり、于さんはアルバイトを辞め、大学に行きながら働けるスナックにかわつた。いつかの中国旅行のために平田さんと僕は于さんから中国語を習い始めた。平田さんにとっては七〇の手習い。これも仲人の役目とも思っていたのだろうか。于さんの勤めるスナックにみんなで押しかけた。それから『いつでも夢を』をデュエットした。やがて、楽しい時はすぐに終わり、行き違いが生まれた。それは中国と日本という文化の段差であつたのかもしれないし、金銭感覚の段差であつたのかもしれないし、また年の差、男女の差でもあつたのかもしれない。ただ単に于さんが経済の面でも言葉の面でも平田さんから独立してやっていけるようになったというだけのことなのかもしれない。ともかく行き違いは拡大し、平田さんと于さんは決定的に決裂してしまつたのだ。僕はこのままではあんまりではないかと、少しは動いたのだけれども、なんの働きもできず、かえつて不信をつのらせるばかりだつた。僕と于さんの間にさえ。もともと仲人役に勤めていた平田さんとの決裂は、于さんにとって、僕との決裂でもあ

ったのかもしれない。その亀裂を埋める努力もしないまま、すべてが自然消滅してしまったのだ。一年半後、僕は長い休暇を申し出た。すべてがご破算になってしまったけれども、だけれども、あのとき、あの暑い日に三人で約束した中国旅行をようやく決行するのだという気分だった。残念ながら旅をとにもする道連れは誰もいなくなってしまったけれども。

*

目覚めると、ひとりだった。まるで夢とうつつの間を一夜の嵐が通り抜けたような気分だった。しばらくぼんやりとし、それから一歩ずつ再び現実というものに足を踏み入れるように、顔を洗い、コーヒーを飲み、雲岡石窟への行き方をおさらいする。雲岡石窟は大同の西約一六キロ。路線バスでいったん大同西はずれの新開里というところまで行き、そこで石窟前を通るバスに乗り換えることになる。

荷造りをすませ、CITSの建物を出て、まずは雲岡賓館で両替。それからバスに乗って、新開里まで。新開里は街はずれで華やかな賑わいのあるところではないが、くすんだような街並の所々に平日朝の活気のようなものが漂っていた。仕事前の人たちを相手に店を出している露店で朝食。春雨のラーメンのような汁だ。

雲岡石窟へと向かうバス停が分かるかどうか心配していたのだけれども、新開里からさらに西へと延びる大通りを見るとすぐに分かった。停留所の路線案内を調べて、十個目の停留所が雲岡石窟であることを確認し、バスに乗った。というのも、気付かずに乗り過ぎてしまうことを心配したのだ。

一つ、二つ、と止まった停留所の数を数えながら、バスに揺られて行く。バスはすぐに市街地を離れ、田舎道を進んでいく。どんよりとした曇り空だからか、やけにくすんだような気がする景色だ。乗客は停留所ごとに乗り込み、また降りていく。石窟の見学に行くような感じの人は少なく、不安はつる。しかし、バスが雲岡石窟前に着いたときは、石窟山門や広い参道が見えたので、すぐにそれと分かった。新開里からは約三〇分。参道の所々にはお土産物屋さんや食堂、それに二、三の屋台。思ったよりもひっそりとした印象だ。

雲岡石窟は武周山の南麓にあり、東西約一キロメートル。現存する石窟は五三、大小五一〇〇〇の仏像があるということだ。北魏が大同に遷都した六二年後、四六〇年に、時の沙門統曇曜の指揮によって彫られたものが最も古いものだ。

清代に重建されたという楼阁を入っていくと、すぐに第5窟。薄暗い洞

窟内部に足を踏み入れると、最初から僕は立ちつくしてしまった。そこには中央に一七メートルの座像がそびえ、それを囲む洞窟の壁にはそれこそ無数の大小の仏像が、座像を囲むようにして彫られているのだ。仏像は立体的で、あざやかな彩色もほどこされている。なるほど敦煌の莫高窟の見学のあと、ヒゲとスカシの二人連れが大同の石窟と比べてけなしていたこともうなずける。莫高窟の壁はほとんどペインティングだったからだ。薄暗い洞窟の内部で無数の仏像の沈黙というものにさらされていると、そこには濃密で神聖な気のようなものが満ちているような気がして、僕は思わず襟を正して立ちすくんでしまうのだ。

第5窟のあとは、第5窟とペアになっている隣の第6窟。そして楼閣を出て、比較的規模の小さな第7―第10窟とたどっていく。しかしながらその規模は小さいとは言っても、柵にもたれてその内部を覗き見ると、窟の内部はその壁面から天井に至るまで、ことごとく大小の仏像で埋めつくされている。しかも無数の仏像がそれぞれの姿態と表情をもって、おびただしく羅列し、あるいはそこにある種の物語性をほのめかす。立ち止まって覗き見る僕には言葉もなく、ただ見入るばかりだ。

洞窟は観光客が歩いて見られる地面の高さだけでなく、二階、三階にあたる部分にも見える。また、ローマの遺跡をほうふつとさせるような巨大な立柱が建ち並ぶ部分もあり、まさに雲崗石窟それ自体が巨大な彫刻のようでもある。

第16―20窟は雲崗石窟の最も古い時代、北魏の時代に曇曜によって彫り始められたもので、曇曜五窟と呼ばれている。古い時代のもだから色彩がはげ落ちたのか、あるいはもともと彩色されてはいなかったのか、洞窟や山の岩膚と同色の仏像だ。しかし他の窟の絢爛と言っても良いような細工を見てきた目には、岩膚に突然浮かび上がったような存在感を見せつける。しかも最も有名な第20窟の座像などはそれこそ天をつくと言っても良いような巨大さなのだ。まるで釈迦の手の平にいる孫悟空にでもなったような気分で、その全貌を視界におさめるために、僕は思わず後退りをしたのだ。

石窟の大きなものはほぼそれで終わり。石窟はさらに続いているのだけれども、風化や破壊のために、ほとんど原形をとどめていない。まるで歳月に削り取られた石の地藏さんのようであったり、あるいは壁の彫刻はただなのでこぼこのようにも見えたりした。また顔の部分だけが削り取られたように見える仏像が多いのは、仏教弾圧のなごりだろうか。それにしては有名な石窟の仏像が無事で、小さな石窟の仏像が無残な顔のない姿をさらしているのは奇妙な気もした。有名な石窟のものはすでに修復されたあとなのかもしれないけれども。

僕は小さな、まるで無縁墓のようにも思われる石窟をひとつひとつ雲崗石窟の端までたどっていった。まるで捨て置かれたような石窟と顔のない仏像たち。その姿は、有名な石窟の仏像とはまた違った力を持って、僕を引きつけるのだった。

気がつくとも、石窟は途切れて、草の生えた山の斜面のようになったところに出た。石窟の見学でいささか疲れたので、腰を下ろして休憩した。眼下の山の斜面には木立が生い茂り、その彼方には、曇天の下に何かの広い工場のような工業団地のような建物が並んでいるのが見えた。ところどころに煙突が立ち、建物のそこそこには薄い煙が漂うように流れていた。ときおりポツポツと雨が感じられた。空は鉛色で、ちよつと肌寒かった。しばらく休憩したあと、もう一度逆向きに雲崗石窟をたどりなおして、大同の街に戻るうか、と思う。

雲崗石窟を出たのは、昼を少し過ぎた頃。折り悪く、雨足が急に強くなってきた。石窟門前に店を出していたお土産などの屋台もあわてて店仕舞。僕もあわてて、門前の鐘樓の屋根に駆け込んだ。雨はしばらく降り続け、大道の商人たちや、付近の子供たちとともに、しばらくなすすべもなく雨を眺めていた。目の前を写真屋さんの馬（それにお客を乗せて記念写真を撮る）がゆっくりと行ったり来たりしていた。

腹が減っていたので、雨足が弱まったのを見計らって、参道をバス道の方に歩いていった。途中で適当な食堂でもあれば、と思ったのだけれども、あいにく開店休業状態で入りづらい。たまたまバス道付近にラーメン屋があったのだけれども、こちらの方は満員で入れなかった。がっくりとして、ふと見ると、バス道の方から女の人が手招きをしているのが目について、そちらの方に歩いていくと、刀削面の屋台。幸いに雨は上がっていたけれども、雨に濡れた屋台は少ししよぼくれた感じだった。しかし他に適当な食堂もなく、女主人の勧めに押されてベンチに腰を下ろした。ついでに女主人の勧めで何やら分からないまま肝肉の煮物を注文してしまった。刀削面は薄い塊のようで、また肝肉は臭いが強くて、あまりおいしいものではなかったけれども、腹が減っていることだし、満足することにした。

食事のあと、煙草をふかしながらバス道へ出てみると、来たときには気がつかなかったのだけれども、石炭の粉が道の脇にたまっていた。バス停でバス待ちをしていると、次から次へと石炭を山積みにしたトラックが通り過ぎていく。トラックの荷台からは粉のような石炭の粉塵が舞い落ち、それが道路の両脇に黒々とたまり、風に吹かれては舞い上がるのだ。雲崗石窟という観光地のすぐかたわらに、石炭の粉塵に煙っているような大同のもうひとつの顔。

大同は石炭の街でもあるのだ。僕はさつき雲崗石窟の外れから見下ろしていた何かの工場街のように思われる景色を思い出した。あれはもしかしたら炭鉱か、石炭の加工かなにかの工場なのかもしれない。そして僕はさらに思う。昨夜の二人連れの日本人が五〇年前に働いていたという鉄鋼関係の会社というのは石炭の街として大同ともちろんつながっている。僕はふと、薄い煙の漂っていた工場街のただ中に、あの二人連れの男たちと、同僚だったという中国人の姿を幻想する。それはもちろんただの想像でしかなかったのだけれども、僕はふと、鉛色の雨雲の下にうずくまっているような大同郊外の、石炭の粉塵に煙ったような情景の地下に、五〇年前の日本の歴史というものが埋もれているような気がしたのだった。

路線バスを乗りついで、新開里を経て、南門まで戻った。ちょうど昨日の善化寺から少し南に下りたところだ。なかば風化して土手のようになっている城壁の南沿いの道を歩いていく。別に行くあてがなかったたので、地図に出ている雁塔というものを見に行こうと思ったのだ。雁塔は城壁の東南角近くにある。

城壁の南は再開発の対象にはなっていないらしくてレンガ造りの低い街並が続いていた。すでに雨は上がっていたけれども、道は泥だらけだった。人影もほとんどなく、まるで時間が止まったかのように静かな往来。家屋の脇にはときおり石炭が積まれていて、まさに石炭の街にふさわしく、家庭用の主たる燃料として使われていることをうかがわせる。音もなく立ちすくむ電柱。瞑想するかのような表情を浮かべたロボのゆつくりとした動き。雁塔はやがて城壁の内側に覗き見えたけれども、その由来は分からないながらたいしたことはなかったし、もちろん内部に入れるようにもなっていないだったので、そのまま素通り。東城壁の東側の道を歩いた。雨に濡れたぬかるみの道にはゴミが散乱し、あるいは捨てられた食べ物の屑が悪臭を放っていた。あるいは家々の裏路地にあたる道なのかもしれない。折よく見つけた公衆便所に入っていくと、汚物の山にまたがるような格好の女の尻。びつくりして反対の入口へとまわった。汚物まみれの公衆便所。最低最悪。使用料は取られなかったけれども。

行くあてもないままに、昨日の大西街、大東街のひとつ南の路地を西の方へと歩いていった。中央部にそびえる鼓楼の下で小休止。それからまた路地を歩いていく。ちょうど大西街の南。繁華街の大西街の一本南の路地とは思えないような静かな通りだ。レンガ造りの平屋の古い街並が続く。道路も家並も一様に茶色がかった灰色の街。ときおり人や自転車が通りかかるくらいで、自動車の姿はほとんど見かけない。大同という街の都心

部とは思えないゆつくりとした空気の流れ。

いつのまにか空は晴れていた。雲間から差し始めた日差しはすでに初夏。雲岡石窟で肌寒さを感じたことがまるで嘘のように、歩いていると体は汗ばんでくる。路地は郵電大楼に突き当たり、そこを北に上がると、昨日の華厳寺の脇を通って、大西街に出る。

大西街に出てみると、月曜日だというのに、昨日と同じような賑わいだった。裏路地の静けさとはまるで別世界のように、行き交う人々の空気も華やかに浮かれていた。雑踏を泳ぐように歩きながら、しばらくその空気を楽しんだ。

たまたま目についだアイス屋さん(自転車の)からアイスを買って食べた。ちょうど百貨大楼脇の歩道。植え込みにもたれて食べながら見ていると、母親と子供の客がアイス屋さんに近づいていくところだった。母親は子供にアイスを与え、その包み紙を優しく剥いてやり、なんのちゅうちよもなく歩道に捨てるのだった。ついでに自分のアイスも剥いて、捨てる。良心の咎めのかけらも感じていないような、その自然なふるまいがあっぱれという感じだった。見ると、歩道の至る所にアイスの包み紙が散乱している。中国を旅行しているとやほりドキとしまうのだ。もちろん彼らには彼らの言い分がおそらくはあり、行きがかりの僕がその光景だけを取り出してうんぬんすることはない。

大西街の北西に広がる大同公園に入ってしまった。かなり歩いたし、やはり雑踏はなんとなくうつとうしくて、静かな場所で休憩したかったのだ。平日ということもあって、公園内には人影はなく、静かだった。通り過ぎた雨のために所々には水たまりができていたけれども、木立は雨に濡れて新鮮な気を放っていた。人民解放軍の勇ましい像の前に人気がないベンチが並んでいたのも、そこに横になってしばらく寝た。すぐ近くに、ひび割れた音声でラジオが鳴っていた。若者たちがラジオの音楽を楽しんでいるのだろうか、それは別にいとわしいものではなく、すぐ近くに感じる人の気配というものにむしろやすらぎを感じながら、僕はしばらく眠ったのだった。

大同公園を出てから、またしばらく大西街をぶらつき、バスに乗って大同火車站へと戻った。と言いたいところだけれども、ここでアクシデント。大西街の散歩を最後に楽しんで、中心地から北へ向かう路線バスで火車站へ行こうとしたのだけれども、すでに報告したとおり、そのあたりは大規模な再開発のために廃虚と化しており、北へと向かう大通りも通行止め。バス路線も寸断されているのだった。しかたなく大西街を再び西の

方へと戻り、百貨大樓前からバスに乗った。

夕暮れ時の大同駅周辺は大同の市街地から離れているためか、ターミナルだから人気は少ないのだけれども、少々うらぶれた印象。大同発北京行きの一三三一次快客列車は午後二一時の発、北京到着は翌朝午前七時四一分。出発まではかなりの時間があり、腹が減っていたので、食事をすることにした。

たまたま目についた旅社と兼業の食堂に入っていくと、広い食堂に客はひとり、ふたり。張り出されたメニューを見ながら、茄子と肉の炒めもの、米飯、卵スープを注文した。旅社と兼業の食堂だからか、出された器はどれも一人前くらいの小さな器で、少々拍子抜けしてしまった。その代り、代金は五・四元なり。

歩道を歩いていると、日本製だという触れ込みのポルノ映画の看板があった。日活かどこかのポルノ映画が輸入されているのだろうか。スタンドには表紙だけどぎついポルノまがいの雑誌類。しかし僕はその猥雑さにむしろ好感をもっていた。

商店で「健力」という標章のアルミ缶のオレンジジュースを買い、ロータリーに腰を下ろして休憩した。あたりはすでに暮れ落ちて、憩う人々や列車を待つ人々が、ロータリーには雀のように並んでいた。

行李寄存処から大荷物を受け出し、駅前の階段に腰を下ろした。崔健のテープをヘッドフォンステレオで聞く。午後二時発の列車にはまだまだ時間があり、僕はもうなにもすることがなく、ただ崔健のロックに耳を傾けながら、薄暗い駅前の階段に座り込んでいる。